

巻頭
言

木から落ちたサル

会長 山崎 學



「日本精神科病院協会雑誌」は昭和57年1月の創刊から42年を経て、本号で通巻500号を迎えた。

本誌は機関誌であり、会員相互の情報共有、啓発、研鑽に役立てることを目的に発行している。会員のほか、関係諸団体、官公庁、大学、研究機関等へも送付しており、学術誌では知り得ない精神科医療の現況や臨床現場の動向の情報が得られるとして好評で、広報誌としての役割をも担っている。

500号発刊に当たり、今までご苦労いただいた広報委員会の先輩諸先生・現役の諸先生に敬意を表するとともに、次の600号に向かって会員一同で取り組んでいきたいと思う。

今国会の参院予算委員会において3月3日に立憲民主党の小西洋之政調会長代理が持ち出した総務省文書による高市早苗経済安全保障担当相に対する追及劇はまれにみるひどさだった。高市大臣が捏造文書と答弁したのに対して仮に捏造文書でなければ大臣・議員辞職をするのかと迫り、その後の3週間はひたすら行政文書追求と高市大臣攻撃に明け暮れた。その結果、本来予算委員会で検証しなければならない新年度予算について審議する機会が奪われ、3月28日に新年度予算は与党ペースで成立した。平成27年に安倍政権下で政治的な圧力により放送法の解釈変更を試みたという総務省文書についても総務省で精査した結果、正確性が確認できなかったうえ、当時総務大臣だった高市大臣について行ったとされる大臣レクについても確認できず、総務省文書なるものの信憑性について疑問が投げかけられた。

腹の虫がおさまらなかった憲法学者を自称する小西議員は、週1回行われている衆院憲法審査会をやり玉に挙げて「毎週開催は憲法のことなんか考えないサルがやること、蛮族の行為だ、野蛮だ」と発言し、与野党から非難が浴びせられ、泉健太立憲民主党代表から参院憲法審査会野党筆頭幹事を更迭される事態になった。新年度予算では異次元の少子化対策問題、防衛費負担増問題、エネルギー問題、社会保障財源問題等の予算が組み込まれており、国会できちんとした審議が行われなければならなかったが、総務省文書に固執して膨大な国民の税金で賄われている国会を空転させた立憲民主党の責任は重い。自身の発言をオフレコ発言と釈明したが、2月に同性婚を巡り、同様にオフレコで差別的発言をしたとして辞任させられた首相秘書官事件がブーメランのように立憲民主党に戻ってきた。さらに3月29日以降、発言を報じたNHKとフジテレビに対して「元（総務省）放送政策課課長補佐にけんかを売るとはいい度胸だと思うが」「放送法な

どあらゆる手段を講じて、その報道姿勢の改善を求めたい」とTwitterで逆切れしている。政治的圧力で放送法の解釈変更を試みたとして追求している本人が元総務省官僚だった自身の経歴を使ってテレビ局に圧力をかけようとしている自己矛盾について気が付かないとしたら、あきれてものがいえない。また、高市大臣について議員辞職をかけて追及していたのだから、自己の議員辞職についても触れるべきなのに、ここでも自己矛盾が露呈している。

作成者の記載も日付もない怪文書もどきの文書を振りかざして数十日間も国会を空転させて数十億円の国費を無駄遣いさせた輩が議員バッジを付けていられるとは、議員の質も落ちたものである。審議過程で示された安倍総理（当時）と高市総務大臣（当時）との電話と称する内容が事実なら、盗聴行為による立派な犯罪行為である。2001年1月6日に中央官庁の再編で総務庁、自治省、郵政省の合併で現在の総務省が誕生したが、合併後も世間によくあるように旧郵政省派、旧自治省派の対立が続いているという。敬愛するジャーナリストの高山正之氏は旧郵政省派の小西洋之議員が旧自治省出身の磯崎陽輔首相秘書官追い落としを狙った内部抗争と喝破している（THEMIS・2023年5月号 No.367）。小西議員の責任追及について、立憲民主党内部では左派系議員の擁護で沙汰止みになってしまった。支持率が回復しないのもむべなるかな。